

原 著

**健常児と自閉症児におけるナラティブ産出
—フィクショナルストーリーとパーソナルナラティブの分析から—**

仲野 真史*・長崎 勤**

健常児 6～8 歳児各群 6 名と MA 6～8 の自閉症児 3 名を対象に、フィクショナルストーリー及びパーソナルナラティブの観察を行い、ミクロ構造、マクロ構造の両側面から分析した。健常児 6～8 歳では、ミクロ構造の結束性には発達的変化が見られなかったが、マクロ構造のストーリー構造レベルは高次化していることが示された。また先行研究より結束性が 6 歳以前に発達していると考えられることから、ミクロ構造において出来事を結びつける能力が獲得されてから、マクロ構造においてそれらの出来事を構成する能力が発達するというナラティブ産出の発達過程が示唆された。自閉症児においては、ミクロ構造の結束性、マクロ構造のストーリー構造レベルの両方において困難を持つこと、また結束性の生起頻度が高い場合でも、ストーリー構造レベルは低次にとどまることが示された。以上より、結束性の発達はストーリー構造レベル高次化の必要条件であるが十分条件ではないことが示唆された。ナラティブのタイプという観点においては、自閉症児は特にパーソナルナラティブにおいて困難をもつことが示された。

キー・ワード：パーソナルナラティブ フィクショナルストーリー

I. はじめに

従来、言語学の領域において主に用いられてきたことばの分析単位は音韻、語、文であった。しかしこれらの単位では会話など実際の言語使用場面におけることばを適切に捉えきれないことから、談話という単位が用いられるようになった（橋内, 1999）。また言語は音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論の各側面からとらえられるが、Owens (1991) は語用論が言語の他側面を組織化するという機能モデル (functional model) を提唱している。このように言語発達研究において実際のことばの使用場面、またその使用場面においてことばを捉える

枠組みとしての談話が注目されている。

談話には「少なくともひとつの時間的結合を含む連続した節」(荻野, 2001) であるナラティブと「短いターンで役割交代を伴う 2 人以上の参加者による話し言葉の談話」(Hughes, McGillivray, & Schmidek, 1997) である会話が含まれる。さらにナラティブは実際に起きた出来事に関する語りであるパーソナルナラティブ、空想の出来事の語りであるフィクショナルストーリー、ルーティン化された出来事に関する語りであるスクリプトに分けられる (Hughes et al, 1997)。

さて岡本 (1985) は「一次のことば」と「二次のことば」という概念を用いて言語発達を説明している。「一次のことば」は特定の親しい人との対面会話的関係の中で働き、場面文脈の

* 筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科

支えによって伝達される。「二次のことば」は不特定多数の他者に対し場面を離れた事象に関して伝達するもので書きことば等も含まれる。ナラティブでは「いま、ここ」という場面文脈を離れた事象が特定の親しい人や不特定多数の他者に伝えられる。また子どもははじめ母親等の特定の親しい他者とのやりとりを通して過去経験を振り返り、やがて一人で過去経験を語るようになる。これらのことからナラティブは「一次のことば」と「二次のことば」の過渡期に位置するものとして考えられ、ナラティブと読み書き等を含むアカデミックスキルとの関連も指摘されている (Hughes et al, 1997)。またことばを通して自分の過去を対象化するパーソナルナラティブが「自己」の発達につながることも指摘されている (岡本, 2005)。さらにナラティブは他者の視点を含んでおり、自己—他者関係の認識 (岡本, 2005)、他者信念の理解 (岩田, 2001) とも関連がある。このように、ナラティブはアカデミックスキルや自己形成、他者の心の理解といった他の様々な能力の基盤となると考えられている。

ナラティブの評価において、Hughes et al (1997) はミクロ構造レベル、マクロ構造レベルに分けてナラティブ分析の方法を概観している。ミクロ構造レベルの分析としては、結束性分析、文法、語彙の多様性の分析が挙げられる。結束性分析は接続詞や指示詞などを使って出来事をどのようにどれくらいの頻度で相互に関連付けているのかを評価する。文法の分析は文レベルの文法の適切さを評価し、語彙の多様性に関する分析は人物や活動を表現する際の語彙の豊かさを評価する。マクロ構造レベルにおいては、ナラティブ全体がどのように構成されているのかに関する分析として、フィクションナルストーリーではエピソード分析、パーソナルナラティブではハイポイント分析が挙げられる。エピソード分析は問題の設定とその解決という枠組みから、ハイポイント分析は経験をどのように重み付けているのかという観点からナラティブのマクロ構造を分析するものである。このよ

うに、ナラティブは複数の視点から評価されており、ナラティブを包括的に捉えるにはミクロ、マクロ両レベルにおける分析が必要だと考えられる。さらにパーソナルナラティブとフィクションナルストーリーでは異なる構造、発達経過を示すことが報告されており (Allen, Kerto, Shrblom, & Pettit, 1994)、子どものナラティブを評価するには単一のタイプのナラティブを評価するだけでは不十分であるといえる。

子どものナラティブはマクロ構造、ミクロ構造の両方において発達していく。マクロ構造においては5歳から12歳にかけて物語のストーリー構造レベルが発達する (Stein & Glenn, 1979)。またミクロ構造では学齢児童期を通して文の長さが長くなっていき、副詞節や関係詞節を含む文法が複雑化する (Gillam & Pearson, 2004)。

一方、言語障害をもつ子どもはミクロ構造、マクロ構造の両方において困難を示しており、彼らのナラティブは健常児と比べて不完全で複雑化されておらず、組織されていない (Gillam & Pearson, 2004)。特に自閉症児では因果的、時間的、意図的な語用論的標識が欠けていること、「それから」などの語用論的標識を用いる高機能自閉症児でも、物語の中心として語られるべきテーマに関する説明をしないことなどから「自閉症の中核的障害は経験をナラティブ様式に符号化する能力の低さにあり、その結果、会話の破綻や他者の心の理解の障害が起きている」という仮説が提案されている (Bruner & Feldman, 1993)。

以上のことから、発達障害児の言語発達支援のためにもナラティブの支援及びアセスメント方法の開発、またそのための基礎的研究が求められている。しかし日本の子どものナラティブ発達研究はまだ十分に行われているとはいせず、特にパーソナルナラティブとフィクションナルストーリーという2つのタイプにわたっての分析、マクロ構造、ミクロ構造の両側面における分析はほとんど行われていない。そこで、健常児のナラティブのミクロ構造、マクロ構造がどのように発達していくのか、そして自閉症児

がナラティブのどの部分に困難を持つのかを明らかにすることは、ナラティブの支援及びアセスメント方法の開発にあたって有効な知見を提供すると考えられる。

本研究では、6～8歳の健常児と自閉症児におけるナラティブについて、ミクロ構造に関してはフィクションナルストーリーとパーソナルナラティブの結合性分析を、マクロ構造に関してはフィクションナルストーリーのエピソード分析を行う。これらの分析により、ミクロレベルで出来事をどのように結び付けているのか、そしてマクロレベルでそれらの出来事をどのように構成しているのかという観点からナラティブの発達過程および自閉症児の障害特性を明らかにするとともに、ナラティブのアセスメント及び支援方法開発への基礎資料を提供すること目的とする。

II. 方 法

1. 対 象 児

健常児と自閉症児を対象に観察を行なった。健常児では6歳児群、7歳児群、8歳児群それぞれ6名ずつを対象とした。性別はすべて男子で、学年は1～3年であった。自閉症児は知的障害養護学校の高等部に在籍し、医師により自閉症の診断を受けた生徒3名（1年生女児1名、2年生男児2名）を対象とした。それぞれの生活年齢(CA)と田中ビネー知能検査Vによる精神年齢(MA)及び知能指指数(IQ)は以下に示す通りであった。A児：女児、CA16:2、MA6:8、IQ41。B児：男児、CA16:7、MA7:0、IQ42。C児：男児、CA17:0、MA8:0、IQ47。3名ともに多語文の表出が可能であり、要求、叙述、質問等の伝達機能を持つ発話がみられた。また筆者は観察開始の約3カ月前から対象児の在籍する知的障害養護学校の活動に参加し、観察開始時には対象児の方から筆者の名前を呼び話しかけるなどのエピソードが確認されていた。

2. 観察方法

(1) フィクションナルストーリー課題：フィ

クショナルストーリーの観察である「5枚の系列絵」「1枚の絵」課題ではTest of Narrative Language (Gillam & Pearson, 2004) の一部を使用した。

1) 「5枚の系列絵」課題：学校に遅刻した少年を表した5枚の絵画系列が提示される。対象児は「この絵を見てお話を創ってください」という指示を受けて物語を創り、観察者に語った。並べられた出来事を子どもはどのように結びつけるのか、そして全体としての物語をどのように構成するのかという観点から課題が設定された。5枚の絵の系列が物語の流れを示しているため「1枚の絵」課題と比較すると子どもの負担は低いと考えられた。

2) 「1枚の絵」課題：少年と少女と宇宙人が描かれた1枚の絵が提示される。対象児は「この絵を見てお話を創ってください」という指示を受けて物語を創り、観察者に語った。物語生成においては絵に示されていない出来事も付け加えなければならなかった。1枚の絵から子どもがどんな物語を創り出すのか、そしてそれはどのような結びつきや構造を持つのかという観点から課題が設定された。物語の流れ 자체を創り出さなければいけないため「5枚の系列絵」課題と比較すると子どもの負担は高いと考えられた。

(2) パーソナルナラティブ：対象児は「夏休み」と「サッカー大会」の2つのトピックについて尋ねられた。また自閉症児は「サッカー大会」を経験していなかったので「キックベース大会」について尋ねられた。なおキックベース大会当日は3名ともに積極的に競技に参加し、競技中にガッツポーズを取るなどのエピソードが確認されていた。観察においては経験を共有していない大人が「どんなことしたの？」と尋ね、対象児がそれに答えた。対象児が語っている間は相槌や子どものことばの繰り返しは行なうが「だれといったの？」「どう思った？」など特定の情報を引き出す質問は行なわなかった。語りが途切れた場合は「それからどうしたの？」と続きを促した。

3. 記録方法

観察場面をミニディスクレコーダーで録音し、これを文字化した。

4. 分析方法

全ての課題で得られたナラティブサンプルについて基礎分析、結束性分析を行った。また、「5枚の系列絵」課題、「1枚の絵」課題に関しては、マクロ構造の分析としてエピソード分析を行った。分析方法についてはHughes et al (1997) を参考にした。

(1) 基礎分析

1) Communication Unit (以下CUと記述) の数: Loban (1976) の定義によるとCUとは修飾語を備えた各独立節のことである。まずこのCUの数を算出した。サンプルのCUへの分割に関しては、Hughesら (1997) を参考にした。

2) Mean Length of CU (以下MLCUと記述) : 語数をCU数で割り、1つのCUにおける平均語数、MLCUを算出した。サンプルの語への分割に関しては、綿巻 (1993) に従った。

3) Mean Number of Dependent Clauses Per CU (MDCCU) : 従属節数をCU数で割り、1つのCUにおける平均従属節数であるMDCCUを算出した。

(2) 結束性分析 (ミクロ構造分析) : 結束性はCUとCUを結びつける働きをするものである。例えば「男の子は走った／そしてバス停についた」では「そして」の使用により「男の子は走った」と「そしてバス停についた」という2つのCU間に結束性が生起しているとみなされた。結束性分析ではこの結束性の総頻度をCU数で割り、1CUあたりの結束性生起頻度を算出した。結束性のカテゴリについてはTable 1に示した。

(3) エピソード分析 (マクロ構造分析) : 以下の手順でそれぞれのナラティブのストーリー構造レベルを同定した。

1) CU間に時間的関係がなければ、ストーリー構造レベルは「記述的系列」とみなされた。

2) CU間に時間的関係があるが因果的関係がなければ、ストーリー構造レベルは「活動系

Table 1 結束性の各カテゴリ

カテゴリ	下位カテゴリ	例
語彙	繰り返し	男の子はユーフォーをつけました。男の子は、怖いと思いました。
	同義語	ユーフォーからタコみたいな人がでてきた。その宇宙人は挨拶をした。
	反意	男の子は怖がっていました。女の子は行こうとしました。
	部分—全体	ケンジは靴を履きました。靴紐を結びました。
	上位一下位	鳥がいた。コンドルとかいた。
	代名詞	宝物を見つけました。それを持って帰りました。
指示	比較	イヤヤがパンクした。帰る途中に別の災難にもあった。
	接続詞：順接	それで だから すると
	接続詞：逆接	しかし だけど
	接続詞：並立・累加	そして また
	接続詞：説明	つまり ただし いわば
	接続詞：転換	さて ところで では
	接続詞：対比・選択	または あるいは
	接続助詞	男の子は走って、バス停に行きました。
	時間	最初は負けた。次は勝った。
	継続	男の子は怖がってたの。女の子は行こうとしたの。男の子はまだこわがってて行かないって言ったの。

Table 2 ストーリーグラマーの各カテゴリーの定義

カテゴリー	定義	例
セッティング	時間と場所に関する言及。エピソード自体の外側の概念である。	ある日、ケンジとミカは丘の上の草むらを歩いていました。
出来事の開始	ストーリーの動機となる出来事。解決を必要とする問題を含んでいる。登場人物に目標を持たせたり、状態の変化を目指させる機能を持っている。	すると、空からユーフォーが降りてきて宇宙人がでてきました。
内的反応	「出来事の開始」を登場人物がどのように感じているかの叙述。感情語が含まれる。行動するために、登場人物を動機付ける機能を持っている。	ケンジは怖くなりました。でも、ミカは嬉しそうでした。
内的計画	問題を解決するための考え、計画の叙述。	ケンジは逃げようとしたが、ミカは宇宙人と友達になるべきだと思いました。
試み	問題を解決しようとして登場人物によって行なわれる試み。	そして2人は宇宙人のところに行って、宇宙人と話をしました。
結果	「試み」の次に来る出来事。「試み」が成功しても成功していないても因果的に「試み」と結びついている。	そして、2人は宇宙人と友達になることができました。
解決・反応	「出来事の開始」によって引き起こされる最終的な解決や反応。	宇宙人とケンジたちは、次もまた一緒に遊ぶ約束をしました。
エンディング	ストーリーの終了をはっきりと叙述する文や句。	そして2人は家に帰りました。おしまい。

Table 3 ストーリー構造レベルの定義

ストーリー構造レベル	定義
記述的系列	CU間に時間的関係がない。
活動系列	出来事を時間的に羅列するが、因果的関係はない。
反応系列	一連の出来事に因果的関係はあるが、計画や、目標を指向する明白な活動は含まれない。
短縮エピソード	登場人物の目的や意向について述べるが、目的を達成するための計画は明白でない。
不完全なエピソード	計画が述べられるが、「出来事の開始」「試み」「結果」のいずれかがかけている。
完全なエピソード	「出来事の開始」「試み」「結果」が含まれる。
複数のエピソード	反応系列と短縮エピソードの連鎖、不完全なエピソードと完全なエピソードの組み合わせなど複数のエピソードが含まれる。

列」とみなされた。

3) CU間に因果的関係があった場合、それぞれのCUをTable 2に示したストーリーグラマーの各カテゴリーに分類した。その上でTable 3に示した定義に従い、ストーリー構造レベルを同定した。

5. 信頼性

CUの同定にあたり全サンプルの約1割につ

いて観察者1名と観察者以外の分析経験を持つ2名の一致率を算出し、96.53%の一一致率が得られた。結束性の同定にあたり全サンプルの約1割について、観察者1名と観察者以外の分析経験を持つ1名の一一致率を算出し、87.83%の一一致率が得られた。ストーリー構造レベルの同定にあたり全サンプルの約1割について、観察者1名と観察者以外の分析経験を持つ1名の一

致率を算出し、75%の一致率が得られた。

III. 結 果

1. 健常児

(1) 基礎分析：CU数、MLCU、MDCCUそれぞれにおいて、各年齢群の平均および標準偏差を算出し、角変換を適用した上で、年齢とナラティブ課題の2要因による分散分析を行なった。要因の主効果が有意であると認められた場合には、LSD法を用いた多重比較を行なった。

1) CU 数：各年齢群のCU数の平均および標準偏差はTable 4に示した通りである。分散分析の結果、年齢の主効果は認められず、ナラティブ課題の主効果は有意であった ($F(2,15) = 14.68, p < .01$)。ナラティブ課題の主効果について、LSD法を用いた多重比較を行なった結果、各課題の平均の大小関係は「『5枚の系列絵』課題 = 『1枚の絵』課題 > パーソナルナラティブ」であった ($MSe = 7.6889, p < .05$)。交互作用は見られなかった。以上から、年齢による差はなく、ナラティブ課題による差が認められた。ナラティブ課題別に見るとパーソナルナラティブが「5枚の系列絵」課題及び「1枚の絵」課題よりもCU数が少なかった。

2) MLCU：各年齢群のMLCUの平均および標準偏差はTable 5に示した通りである。分散分析の結果、年齢、ナラティブ課題ともに主効果は認められなかった。交互作用も見られなかった。以上から、年齢による差、ナラティブ課題による差は認められなかった。

3) MDCCU：各年齢群のMDCCUの平均および標準偏差はTable 6に示した通りである。分散分析の結果、年齢の主効果は認められず、ナラティブ課題の主効果は有意であった ($F(2,15) = 5.57, p < .01$)。ナラティブ課題の主効果について、LSD法を用いた多重比較を行なった結果、各課題の平均の大小関係は「『5枚の系列絵』課題 = 『1枚の絵』課題 > パーソナルナラティブ」であった ($MSe = 2.7707, p < .05$)。交互作用は見られなかった。以上から、年齢による差はなく、ナラティブ課題による差が認め

られた。ナラティブ課題別にみると、パーソナルナラティブで「5枚の系列絵」課題及び「1枚の絵」課題よりもMDCCUが低かった。

(2) 結束性分析（ミクロ構造分析）：1つのCUにおける結束性生起頻度について、各年齢群の平均および標準偏差を算出し、年齢とナラティブ課題の2要因による分散分析を行なった。要因の主効果が有意であると認められた場合には、LSD法を用いた多重比較を行なった。各年齢群の結束性生起頻度の平均および標準偏差はTable 7に示した通りである。分散分析の結果、年齢の主効果は認められず、ナラティブ課題の主効果は有意であった ($F(2,15) = 4.93, p < .05$)。ナラティブ課題の主効果について、LSD法を用いた多重比較を行なった結果、各課題の平均の大小関係は「『5枚の系列絵』課題 = 『1枚の絵』課題 > パーソナルナラティブ」であった ($MSe = 1.3491, p < .05$)。交互作用は見られなかった。以上から、年齢による差はなく、ナラティブ課題による差は認められた。ナラティブ課題別にみると、パーソナルナラティブで「5枚の系列絵」課題及び「1枚の絵」課題よりも結束性生起頻度が少なかった。

(3) エピソード分析（マクロ構造分析）：「5枚の系列絵」課題と「1枚の絵」課題で得られたナラティブサンプルについて、年齢群ごとに各ストーリー構造レベルの生起頻度を総ナラティブ数（各年齢群の人数 = 6）で割り、年齢群ごとの各ストーリー構造レベル生起率を算出した。

1) 「5枚の系列絵」課題：6歳児群では「活動系列」が33%、「反応系列」が33%、「短縮エピソード」が17%、「完全なエピソード」が17%であった。7歳児群では「反応系列」が50%、「短縮エピソード」が33%、「複数のエピソード」が17%であった。8歳児群では「反応系列」が17%、「短縮エピソード」が17%、「不完全なエピソード」が17%、「完全なエピソード」が33%、「複数のエピソード」が17%であった。このように年齢が上がるにつれて低次の構造がみられなくなり、より高次の構造の割合

健常児と自閉症児におけるナラティブ産出

Table 4 各年齢群におけるCU数の平均および標準偏差

年齢	ナラティブ課題	N	Mean	S.D.
6歳	5枚の系列絵	6	8	2.58
6歳	1枚の絵	6	9.67	3.64
6歳	パーソナルナラティブ	6	3.5	1.38
7歳	5枚の系列絵	6	7.83	2.54
7歳	1枚の絵	6	7.83	5.49
7歳	パーソナルナラティブ	6	4	1.15
8歳	5枚の系列絵	6	9.83	1.95
8歳	1枚の絵	6	8.83	2.03
8歳	パーソナルナラティブ	6	5.5	2.36

Table 5 各年齢群におけるCU数の平均および標準偏差

年齢	ナラティブ課題	N	Mean	S.D.
6歳	5枚の系列絵	6	6.18	1.74
6歳	1枚の絵	6	7.83	1.84
6歳	パーソナルナラティブ	6	6.88	3.07
7歳	5枚の系列絵	6	6.78	1.72
7歳	1枚の絵	6	8.36	1.24
7歳	パーソナルナラティブ	6	9.7	6.08
8歳	5枚の系列絵	6	7.13	1.6
8歳	1枚の絵	6	10.15	2.4
8歳	パーソナルナラティブ	6	5.87	2.64

Table 6 各年齢群におけるMDCCUの平均および標準偏差

年齢	ナラティブ課題	N	Mean	S.D.
6歳	5枚の系列絵	6	2.97	0.48
6歳	1枚の絵	6	2.54	0.36
6歳	パーソナルナラティブ	6	1.17	1.74
7歳	5枚の系列絵	6	2.93	1.46
7歳	1枚の絵	6	3.42	0.81
7歳	パーソナルナラティブ	6	2.49	2.95
8歳	5枚の系列絵	6	3.71	0.72
8歳	1枚の絵	6	3.46	1.77
8歳	パーソナルナラティブ	6	1.04	1.48

Table 7 各年齢群における結束性生起率の平均と標準偏差

年齢	ナラティブ課題	N	Mean	S.D.
6歳	5枚の系列絵	6	6.58	1.26
6歳	1枚の絵	6	8.08	0.98
6歳	パーソナルナラティブ	6	6.51	1.3
7歳	5枚の系列絵	6	7.32	0.97
7歳	1枚の絵	6	6.47	1.02
7歳	パーソナルナラティブ	6	6.2	1.08
8歳	5枚の系列絵	6	7.37	0.88
8歳	1枚の絵	6	7.75	0.78
8歳	パーソナルナラティブ	6	6.04	1.2

が増加していた。

2) 「1枚の絵」課題：6歳児群では「記述的系列」が17%、「活動系列」が17%、「不完全なエピソード」が50%、「完全」なエピソードが17%であった。7歳児群では「反応系列」が17%、「短縮エピソード」が17%、「不完全なエピソード」が50%、「複数のエピソード」が17%であった。8歳児群では「不完全なエピソード」が50%、「完全なエピソード」が50%であった。このように年齢が上がるにつれて低次の構造がみられなくなり、より高次の構造の割合が増加していた（Fig. 1 参照）。

2. 自閉症児

(1) A児：CU数は「5枚の系列絵」課題で4、「1枚の絵」課題で6、パーソナルナラティブで4であった。MLCUは「5枚の系列絵」課題で6.25、「1枚の絵」課題で5.5、パーソナルナラティブで4.25であった。MDCCUは全ての課題で0であった。結束性生起頻度は「5枚の系列絵」課題で1.5、「1枚の絵」課題では0.66、パーソナルナラティブで0.25であった。ストーリー構造レベルは両方の課題で「活動系列」であった。このようにA児は、「5枚の系列絵」課題

におけるMLCUでMAによりマッチングされた健常児6歳児群の平均を超える値を示した。結束性については「5枚の系列絵」課題において健常児6歳児群の平均よりも高い値を示し、パーソナルナラティブで最も低い生起頻度を示した。

(2) B児：CU数は「5枚の系列絵」課題で5、「1枚の絵」課題で4、パーソナルナラティブで3であった。MLCUは「5枚の系列絵」課題で5.8、「1枚の絵」課題で4.5、パーソナルナラティブで4.33であった。MDCCUは「5枚の系列絵」課題で0.2、「1枚の絵」課題で0、パーソナルナラティブで0であった。結束性生起頻度は「5枚の系列絵」課題で0.4、「1枚の絵」課題で0.5、パーソナルナラティブで0であった。ストーリー構造レベルは両方の課題で「記述的系列」であった。このようにB児はパーソナルナラティブで結束性が全く生起せず、ストーリー構造レベルは両方の課題で「記述的系列」と最も低いレベルであった。

(3) C児：CU数は、「5枚の系列絵」課題で13、「1枚の絵」課題で12、パーソナルナラティブで4であった。MLCUは、「5枚の系列絵」

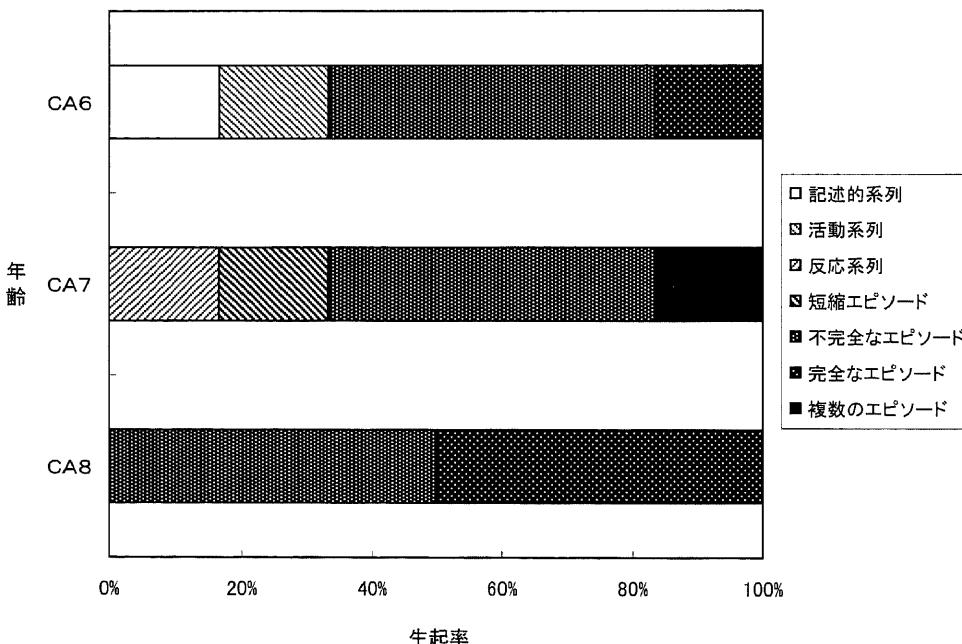


Fig. 1 各ストーリー構造得レベルの生起率：「1枚の絵」課題

課題で6.46、「1枚の絵」課題では6.41、パーソナルナラティブでは4であった。MDCCUは、「5枚の系列絵」課題では0.31、「1枚の絵」課題では0.33、パーソナルナラティブで0であった。結束性生起頻度は、「5枚の系列絵」課題で1.23、「1枚の絵」課題で1.16、パーソナルナラティブで0であった。ストーリー構造レベルは「5枚の系列絵」課題では短縮エピソード、「1枚の絵」課題では「活動系列」であった。このようにC児は「5枚の系列絵」「1枚の絵」課題において健常児の平均よりも多くのCUを産出した。ストーリー構造レベルは「5枚の系列絵」課題で中程度のレベルに相当する短縮エピソードであった。

3. ナラティブタイプによる比較

本研究では3種類のナラティブ課題を実施したが、ナラティブのタイプにおいてはフィクションナルストーリー（「5枚の系列絵」課題、「1枚の絵」課題）とパーソナルナラティブに分けられる。そこで結束性分析の結果について、「5枚の系列絵」課題と「1枚の絵」課題の平

均からフィクションナルストーリーの値を算出し、パーソナルナラティブとの比較を行なった。Fig.3に示したように、結束性生起頻度は、フィクションナルストーリーでは、A児1.08、B児0.45、C児1.20であった。一方、パーソナルナラティブにおいてはB児C児で、結束性が生起しなかった。またA児についてもフィクションナルストーリーで1.08に対し、パーソナルナラティブで0.25の生起頻度を示し、健常児と比較してパーソナルナラティブにおける結束性の遂行において著しく低い傾向を示した（Fig.2参照）。

IV. 考 察

1. 健常児のナラティブ発達

すべての課題でCU数、MLCU、MDCCU、及び結束性に関して健常児6～8歳において発達的変化は確認されなかった。しかしストーリー構造レベルについては6歳でみられた「記述的系列」や「活動系列」が7歳以降は見られなくなり、8歳では「完全なエピソード」が増えるというように年齢とともに高次化することが

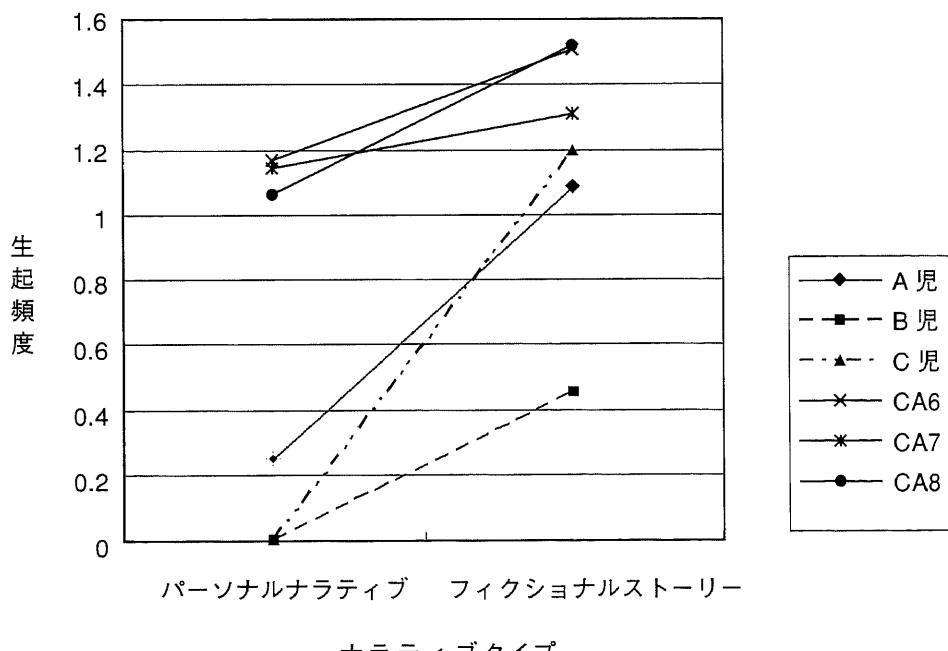


Fig. 2 ナラティブタイプ別にみた結束性生起頻度

示された。本研究の対象児は6～8歳であったが、大伴（2000）は4歳～5歳にかけて接続詞や接続助詞等の接続表現が発達することを報告している。つまり彼らは6歳までにミクロ構造における結束性にある程度の発達を遂げており、6～8歳では結束性に大きな発達的変化はみられなかっただ可能性がある。一方マクロ構造において出来事をナラティブとして構成する能力には発達的変化が示された。このことから、はじめにミクロ構造において出来事と出来事を結びつける能力を発達させてから、それらの出来事をマクロ構造において「完全なエピソード」など高次のレベルで構成するようになるというナラティブ発達の過程が示唆されるといえよう。

2. 自閉症児のナラティブにおける特性

自閉症児はすべての課題の基礎分析及び結束性分析結果において健常児と比べて全般的に低い値を示し、マクロ構造分析においても低いストーリー構造レベルにとどまった。健常児ではミクロ構造において出来事を結びつける能力をある程度発達させてから、マクロ構造であるストーリー構造レベルが高次化するというナラティブ発達の過程が示唆されたが、3名の自閉症児は結束性が未発達なため、マクロ構造においても低次のストーリー構造レベルにとどまると考えられる。このように自閉症児はナラティブのミクロ構造に困難を持つ。一方でA児の「5枚の系列絵」課題のMLCUや結束性、C児の「5枚の系列絵」「1枚の絵」課題のCU数などのように、健常児の値を越える場合もあった。しかしA児の「5枚の系列絵」課題ではMAでマッチングされた健常児よりも高い結束性生起頻度を示したにも関わらず、マクロ構造のストーリー構造レベルは低かった。つまりミクロレベルで出来事を結びつけることができても、マクロレベルでそれらを構成することには困難を示したといえる。これらのことから結束性はストーリー構造レベルの高次化のための必要条件であるが、十分条件ではないと考えられる。

また本研究ではMA 6～8の自閉症児を対象

としたが、A児（MA 6）の方がB児（MA 7）よりも結束性生起頻度もストーリー構造レベルも高かったというように単純なMAとナラティブのスキルには関連がみられなかった。今後の研究ではどのような能力がナラティブと関連しているのかについて検討することが求められる。

3. ナラティブのタイプ

自閉症児はすべての課題の結束性分析結果において全般的に低い値を示したが、特にパーソナルナラティブにおいて結束性を生起させることはほとんどなかった。Losh and Capps（2003）は高機能自閉症児がフィクションナルストーリーよりもパーソナルナラティブに困難を持つことを報告しており、これは本研究において自閉症児が特にパーソナルナラティブにおいて低い結束性生起頻度を示したことと一致する。さらにLosh et al. (2003) は高機能自閉症児において感情理解課題の成績とナラティブに関連がみられたことについて、感情的経験を時間的因果関係のフレームワークに組み込むことでナラティブはあいまいな感情経験を理解する機会を与えるものであり、ナラティブは感情理解を必要とするとともに感情理解を育むと考察している。また長崎（2004）は健常児と高機能自閉症児のパーソナルナラティブを分析した結果、構造面の発達は健常児と比べ遅れるものの類似した経過をたどるが、内容面では他者や心的状態への言及に困難を持つことを見出した。そしてこの内容面の困難が構造面の更なる発達に制限を生じさせると考察している。また岡本（2005）は自己経験の語り（パーソナルナラティブ）が出来事を解釈し、意味づけ、関係付けようとする行為であると述べている。このように、パーソナルナラティブは出来事を解釈し意味づけ、さらに意味づけられた個々の出来事を相互に関係付け構成するものである。本研究の自閉症児ではパーソナルナラティブにおける結束性生起頻度が低かったが、その要因としては、自閉症児では自己の経験を意味づけ表現することが困難であり、そのため個々の出来事を相互

に関連づけて構成することにも困難を示したためと考えられる。

自閉症児だけでなく健常児もパーソナルナラティブよりフィクションナルストーリーで若干高い結束性生起頻度を示した。これについて、フィクションナルストーリーの2つの課題で用いられた視覚的手がかりが結束性の生起を促進し、自閉症児では特にこの視覚的手がかりの効果が顕著に現れたという可能性も考えられる。自閉症児がなぜパーソナルナラティブに困難を持つかについては、内容面からのナラティブ発達の検討、視覚的手がかりなどの効果の検討など今後更なる研究が求められる。

4. 教育への示唆

自閉症児と健常児のナラティブをミクロ構造、マクロ構造の両側面から分析した結果、以下のことが示唆された。

1) 健常児ではミクロ構造での結束性が発達してからマクロ構造でストーリー構造レベルが高次化すること

2) ミクロ構造での結束性の発達はマクロのストーリー構造レベル発達の必要条件であるが、十分条件ではないこと

3) 自閉症児は特にパーソナルナラティブに困難を示すこと

以上のことから、ナラティブのアセスメントにおいてはミクロ構造とマクロ構造の両側面から評価することが必要であるといえる。その際ミクロ構造の評価方法として結束性分析、マクロ構造の評価方法としてエピソード分析が有効な方法のひとつである。そして支援においてもミクロ構造、マクロ構造それぞれに介入が行われることが望ましいであろう。本研究の「5枚の系列絵」「1枚の絵」課題の結果から、ミクロ構造レベルにおける具体的支援方法のひとつとして語られる出来事を視覚的に提示すること、特に出来事間の関係が捉えやすいように提示することが有効であると考えられる。また自閉症児において特にマクロ構造に困難がみられたことから、ミクロ構造の支援のみではなくマクロ構造への支援が重要であるといえる。その

ためにはナラティブの全体的枠組を捉え表現する経験が必要であろう。また自閉症児はパーソナルナラティブに困難を示したが、パーソナルナラティブでは出来事を心的状態語等で意味づけ、それらを相互に関連づけていく必要だと考えられる。Fivush and Adam (1995)は過去経験の想起において「語り合うことば」と「語り合う場」が必要であると提言したが、このようなパーソナルナラティブへの支援として、興味を持った個人の経験を他者に語る、他者のナラティブを聞く場が必要であると考えられる。具体的には、「見て聞いて活動 (show and tell) (長崎, 2004)」などがあげられるであろう。これらの方法を用いてナラティブの発達を支援していくことが期待される。

付 記

本研究にご協力いただいた対象児、またそのご家族に感謝いたします。なお。本研究は科学研究費補助金基盤研究（B(2)）No.16330130「発達障害児に対する会話発達アセスメント方法と支援プログラムの開発に関する研究」の補助を受けました。

文 献

- Allen, M. S., Kertoy M. K., Shrblom, J. C., & Pettit, J. M. (1994). Children's narrative productions:A comparison of personal event and fictional stories. *Applied Psycholinguistics*, 15.(pp149-176).
- Bruner, J. & Feldman, C. (1997). 心の理論と自閉症の問題.Cohen, B. S., Flusberg, T. H., & Cohen, J. D. (編) . 心の理論：自閉症の視点から（下）(pp3-38) (田原俊二監訳) 八千代出版 (Cohen, B. S., Flusberg, T. H., & Cohen, J. D.(Eds.),(1993).*Understanding other minds : Perspectives from Autism*. Oxford University Press.)
- Fivush, R., Haden, C., & Adam, S.(1995). Structure and coherence of preschoolers' personal narratives over time:Implications for childhood amnesia. *Journal of Experimental Child Psychology*, 60,32-56.
- Gilam, R. B. & Pearson, N. A (2004). *Test of Narrative Language: Examiner's Manual*. Austin, Texas.: Proed An Internatinal Publisher.

- 橋内 武 (1999). ディスコース－談話の織りなす世界－. 東京: くろしお出版
- Hughes, M., McGillivray, L., & Schmidek, M. (1997). Guide to Narrative Language: Procedures for Assessment. WI: Thinking Publications.
- 岩田純一. (2001). 〈わたし〉の発達 乳幼児が語る〈わたし〉の世界. 京都: ミネルヴァ書房.
- Loban, W. (1976). Language development:kindergarten through grade twelve. Urbana, IL:National council of teachers of English.
- Losh,M. & Capps, L. (2003). Narrative Ability in High-Functioning Children with Autism or Asperger's Syndrome. Journal of Autism and Developmental Disorders, 33. (pp239-251).
- 長崎勤. (2004). 健常乳幼児と発達障害児における「心の理解」の発達と援助プログラムの開発. 平成12～15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(2)）研究成果報告書.
- 荻野美佐子. (2001). 物語ることの発達. 秦野悦子（編），ことばの発達と障害: 1ことばの発達入門 (pp173-193). 東京: 大修館書店.
- 岡本夏木 (1985). ことばと発達. 東京：岩波書店.
- 岡本夏木 (2005). 幼児期－子どもは世界をどうつかむか－. 東京：岩波書店.
- 大伴潔. (2000). 健常児と言語発達遅滞児における接続表現の発達－連続絵説明課題を通して－. 特殊教育研究施設研究年報. 2000, (pp1-8)
- Owens, R.E. (1991). Language Disorders:A functional approach to assessment and intervention, 2ndEd. Allyn and Bacon, Boston
- Stein, N. & Glenn, C., (1979). An analysis of story comprehension in elementary school children. In

The Narrative Production of Typically Developing Children and Children with Autism : From Analysis of Fictional Story and Personal Narrative

Masashi NAKANO and Tsutomu NAGASAKI

This study observed fictional story and personal narrative, and analyzed their microstructure and macrostructure. Subjects were 18 typically developing children who were 6 to 8 aged and 3 children with autism who were 6 to 8 mental aged ; typically developing children were equally divided into 3 groups according to their age. Narrative of typically developing children has no change of cohesion at a micro structure level, but their story structure level has developmental change. Therefore, the order of development was suggested; their ability to compose narrative events at a macrostructure level would be acquired after their ability to tie those events at a microstructure level was acquired. For the children with autism, it was shown that they had the difficulty in both cohesion at a microstructure level and a story structure level at a macro structure level, and a story structure level stayed low-level even when they were able to tie events at a microstructure level. Therefore, It was suggested development of cohesion was requirement for development of story structure level, and not sufficient condition for it. In the viewpoint of narrative types. Children with autism especially had the difficulty in Personal narrative

Key Words: autism, personal narrative, fictional story